

混乱した自衛隊派遣要請

兵庫県は混乱と情報の空白の中で、ある決断を迫られていた。窓ガラスが割れ、暖房もない五階庁議室。知事の貝原俊民（六）を中心に五人が円卓を囲む。言葉がない。災害対策会議は第一回から重苦しかった。

地震の被害報告をした消防交通安全課防災係長の野口一行（四）が退席前に言った言葉についてそれぞれが考えていた。

「午前八時十分に姫路駐屯地の陸上自衛隊第三特科連隊から電話がありました。被害は大きくなりそうだから、いずれ知事による出動要請をすることにな

る、と答えておきました」

大規模災害に対処できるのは自衛隊しかない。全員がそう承知していた。だが、自衛隊法八三条の災害派遣要請は驚くほど煩雑な手続きが必要だ。

「災害の状況と要請理由は何か」「派遣期間、人員、車両、船舶、航空機などの数は」「活動区域、内容は」。情報が全くない今、災害状況の説明などできるわけがない。どこへ出動してもらうか、それが決まらなければ要請のしようもない。どうしたらいいのか。

だが、緊急事態に平時の思考は役に立たないどころか、むしろ有害でさえある。

一瞬のためらいさえ災害への対応をとてつもなく遅らせる。一刻も早い決断が必要だった。もつとも、県首脳がその時「危機」を認識していればの話だが。

野口は対策会議で、自衛隊との一分間のやりとりを事細かに伝えたつもりだった。だが、連隊本部一階の指揮所で、県に何度も電話を試みた警備幹部三尉中村博（四）が受けた印象は違っていた。

「被害状況は。LO（連絡幹部）が県庁に向かっています」

「状況がつかめていません。対策本部を設置中です」

中村は「いざれ出動を要請することになる」という文言を聞いていない。白板に書いた内容にも、派遣要請予告はない。県が情報収集に手間取り、派遣要請を考える余裕がない状況だと思っていた。野口が言ったつもりでも、中村は聞いていない。

第三特科連隊はすでに派遣準備に入っていた。だが、県からの正式な要請がない限り、部隊は動けないと自衛隊側は考えていた。「どこへ行けばいいのか。それだけでも言ってくれば」。連隊長の林政夫（四七）は唇をかんだ。

二時間後、二回目の電話。
中村「状況はどうですか」

野口「神戸、淡路北淡地区への派遣をお願いします」

中村「要請時間は」

野口「十時で」

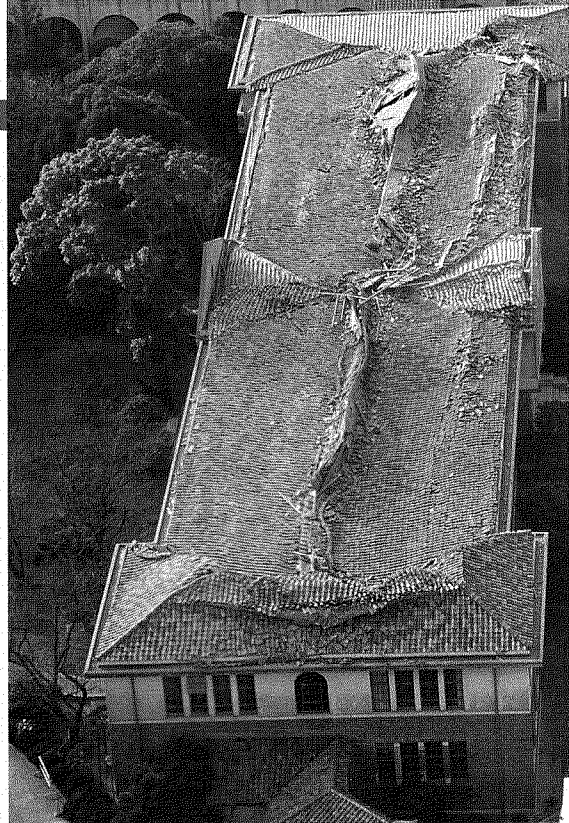
電話が終わると、野口は庁議室に駆け込み、貝原に自衛隊に出動要請したことの後継承諾を取った。貝原は「やむを得ない。それで行け」と指示。野口にとって「出てほしい」と電話で伝えるしか選択はなかった。

九三年の鹿児島豪雨、昨年の中華航空機墜落事故では、鹿児島県知事、空港事務所長が電話で自衛隊に出動要請し、後日、文書で伝えた。今回も同じ手続きを踏んだわけだが、知事ではなく、実務担当者に要請させたのは極めて異例のことだ。

連絡幹部として姫路から同連隊副隊長清水祥人（五）、広報室長堀浩二（四）がヘリコプターで県庁に到着した。「部隊は出発したが、道路が大渋滞しています。七時過ぎに姫路を出た陸路のLOも三時間以上たっても、到着しません。交通規制をかけて下さい」

貝原は被災地の動脈マヒの深刻さを改めて知った。慌てて「県警本部長はどこだ」と叫んだ。本部長の滝藤浩二（五）とはまだ連絡がとれていない。総務部長の梶田信一郎（四七）が「電話が通じません」。貝原は「走って呼んでこい」。強い口調で命じた。

滝藤は早朝、二度県庁に來たが、貝原に会えなかった。混乱の中、行き違いが起きていた。



神戸女学院文学館

米人、メレル・ヴォーリズが1933年に設計。色とりどりのかわらが美しかった（西宮市、1月17日撮影）